



第1章 『浪江のこころ通信』 誕生の経緯とその役割



浪江のこころプロジェクト
プロジェクトリーダー
高崎経済大学地域政策学部
教授
櫻井 常 矢

平成23年3月11日に発生した東日本大震災によって浪江町民（人口21,434人・震災時）が失ったものの甚大さ、切り離された人々のつながり、被害によって受けた精神的苦痛は筆舌に尽くし難いものがあります。大震災による人的被害は、死者182人、震災関連死315人、家屋被害は平成25年7月から始まった「り災証明書」申請により判定されたものだけで525棟（現在も調査中）、避難状況は県内避難14,642人、県外避難6,459人（いずれも平成25年12月31日時点）となっています。町への帰還への意向については、「戻らない」18・8%、「判断がつかない」37・5%、「戻らない」37・5%（平成25年8月時点）となっており、町の復興への厳しさと同時に、「判断がつかない」町民の方が多いことから一人ひとりの苦しみを

も増してきていくことが理解されます。

さらに、こうした数字だけでは現わし得ない苦しみや悲しみもあります。3月12日5時44分、突如出された福島第一原発半径10キロ圏内住民への避難指示によって、津波によって被災した沿岸部の住民を救うことができなかつたという無念さ。同日夕刻までに町民全員を避難させ15日午前まで3日間にわたって過ごした津島地区が、後になって最も線量が高い場所となることを誰も知らされなかつた悔しさ。浪江町の皆さんだけが知る心の傷があるのです。それらの苦しみを抱えたまま町民の皆さんは全国に避難していくことになりました。

あれから3年。町民の皆さんは、それぞれの心の傷みをどのように癒し、互いに苦難を乗り越えてきたのか。この歩みを共にするかのよう、町民相互の絆を育むために誕生した『浪江のこころ通信』（以下、『通信』）は、浪江町と東北圏地域づくりコンソーシアムとの官民協働プロジェクトとして平成23年6月に始まりました。

『通信』は、どのような経緯で始まり、これまでどのような役割を果たしてきたのでしょうか。本編集編では、第1号（平成23年7月）〜第30号（平成25年12月）までを、『通信』にかかわりを持ってきた人びとの言葉をもとに辿りながら、その意味

を考えていきます。この第1章では、設立から今まで『通信』を推進してきた立場（プロジェクトリーダー）から、いくつかお伝えしていきます。

1. 『浪江のこころ通信』の始まり

混乱の中からの出発

平成23年4月、私はレンタカーで二本松市東支所に向かっていました。季節は桜の便りが近づく頃なのに、雨の降りしきる暗く寒い静かな道でありであったことが記憶に残っています。しかし、浪江町役場が当時置かれていた東和支所の2階は、外の静けさとは裏腹に大勢の人たちが行き交い騒然としていました。役場とは言っても、定まった配置となっていたわけではなく、職員の間には思い思いに長机の上に資料やパソコンを並べ、それぞれが必死に作業にあたっていました。誰に声をかければいいのか分からずに私が戸惑っている、と「櫻井先生ですね。」とやさしく声をかけてくれる人がいました。玉川啓復興推進課主幹（当時）でした。すぐに、私はたった1枚の提案資料をもとに、町民の皆さんをつなぐための方策を説明し始めたのです。

実は私は、大震災の前日の3月10日、浪江町役

場職員の皆さんと打ち合わせをしていました。平成23年度から浪江町の総合計画の柱である「協働のまちづくり」のアドバイザーを務めてほしいとの要請を受けていたのです。翌11日の午前中にも、前日の打ち合わせ内容を職員の皆さんとメールで確認するなどしていました。その直後に、あの大地震が起こったのです。無論、そこでアドバイザー

としてのご縁は切れてしまったわけですが、私にはそれがなぜか偶然とは思えなかつたのです。「自分に何かやれることはないか」と。町民の皆さんは今、互いに言葉を交わせぬまま、各地に避難を余儀なくされている。それぞれの想いや考えが知りたいのではないか。しかし役場はそれぞれころではないはず。そんなことを頭の中でくり返しながら、勝手な自分の想いだけで東和支所へと向かつたのです。『浪江のこころ通信』とは、この移動の車中で、いわば私の想いだけで名付けたタイトルでした。

提案資料の説明を始めた私に対して、玉川主幹はじめ数名の職員の皆さんは真摯に向き合ってくれました。けれども、結論は特に出ることもなく、初めての訪問はどこかすつきりしない終わりで済んだ。今になって思えば、震災後50日以上もの間、東和支所に寝泊まりし震災復旧に向き合っていた職員の皆さんにとっては、正直なところ、「それどころではなかつた」のだと思います（第4章参照）。しかし、（あくまでもその時の私にとつて）どこか素っ気ない職員の皆さんの雰囲気、むしろ私を奮起させたのかもしれない。東和支所をあとにした私は、『通信』実現の可能性を

探るため、そしてこの取り組みの連携先を探すため、そのまま車を福島県内のNPOに走らせ、その後も各地をまわることとなるのです。およそ1週間後、私は会津に車を向かせていました。この事業の連携先としてNPO法人寺子屋方丈舎の江川和弥さんを訪れたのでした。

加藤哲夫さんの存在

実は、私と江川さんとはそれまで面識はありませんでした。この大震災を契機に江川さんと私をつなげたのは、加藤哲夫さんだ。みやぎNPOセンター代表理事（当時）でした。加藤さんは、大震災前に浪江町で協働のまちづくりの研修会講師を務めた方ですので、町民の皆さんの中には記憶にある方もいらっしゃると思います。加藤さんはまた、浪江町を含む東北地方はもとより、日本のNPO界のリーダーとして、市民運動や非営利活動を牽引してきたカリスマでもありました。私も、分権時代の新しい地域づくりのあり方を求めて、英国への調査に度々ご一緒するなど親しくさせていただけました。福島出身でもある加藤さんには、この原発事故からの復旧・復興に対しては並々ならぬ想いがあったはず。しかし彼は、大震災の1年ほど前に大病を患っていました。特に大震災後は、病床からメールでのやり取りが続いていたのです。「福島のために何か取り組みたいことはないか」「私（櫻井）が動くのでメールで指示を出してほしい」。そんななか、私が提案した『通信』の企画に対して加藤さんは大いに共感してくれまし

た。同時に、連携先として江川さんを紹介してくれたのです。病床からではありませんが、相変わらず緻密かつ迅速な助言によって、すぐにこの動きは具体化していききました。加藤さんが私に助言したなかでも、実に彼らしい言葉があります。「町民の皆さんを取材した原稿は、行政の検閲だけは受けないようにすること」。彼を知っている方なら、思わず微笑んでしまうかもしれません。避難生活を余儀なくされた町民の皆さんの言葉からは、行政への批判や行政に不都合な言葉も出てくるはず。しかし『通信』には、隠し事のない、ありのままの町民の皆さんの声を載せるべきとの助言でした。この言葉は、浪江町役場やこの活動に携わる者たちにとつて、誰も曲げることのないルールとなつて今もなお『通信』を支えています。その加藤さんは、『通信』第2号の発行を待つて平成23年8月26日、仙台市内のホスピスで静かに永眠されました。享年61歳。『通信』には、加藤哲夫さんの福島・浪江復興への願いが込められているのです。

福島駅喫茶店での夜の話し合い

『通信』実現に向けた私の動きは、しだいに熱を帯びてきていました。しかし、役場との関係を築き上げない限り、この取り組みは具体化しませんが、取材活動は我々がボランティアで頑張るとしても、取材に必要な町民の皆さんの所在地に関する情報、『通信』の印刷や各世帯への郵送など、まだまだ課題は多くありました。そんななか、浪江町の玉川主幹が動きだしてくれたのです。仕事を



プロジェクトを快諾した馬場町長との協定締結の様子

終えた夜に、役場職員の有志5名ほどを連れて、福島駅1階にある喫茶店で私との打ち合わせを開いてくれたのでした。打ち合わせと言っても、まずは自己紹介や相互理解から。私（櫻井）が浪江の復興に向けてどのような考えを持っているのか。今、町民の皆さんのために何ができるのかなどを話し合いました。夜の喫茶店ですから、お互いの表情もはつきりとは見えないこともあり、初対面の私たちはどこかぎこちなかったのですが、「町民のために何か動き出さなければならぬ」という暗黙の合意だけは確かなものであったと思います。その中に1人だけ女性の職員がいました。当時、役場の広報誌担当であった長沼琴さんです。長沼さんは2回目の喫茶店会合の時には、

広報誌に掲載する『通信』のレイアウトを持参し、私たちのやり取りを具体的に前に進めようとした。当時は、町の広報誌は発行されておらず、先の方針も見えない状況でしたが、長沼さんは町の広報誌を再開させ、この『通信』を何とかして町民に届けたいとの強い思いがあったといえます（第4章参照）。長沼さん自身、請戸のご自宅を津波で流され、お子さんたちと離ればなれの暮らしを余儀なくされていた苦しい状況の中でしたが、そのような雰囲気は見せることなく、常に冷静に、しかし何か想いを秘めた言動であったことが印象に残っています。こうして数回の夜の喫茶店会合を重ね、ほぼ見切り発車のような形で、『通信』は動き出すことになったのです。取材活動と原稿作成は私たち民間の力で、そして町民の皆さんへの取材受入れ承諾確認や広報誌の印刷、郵送は役場が行うこととしました。通常であれば、細かな文書のやり取りなど、煩雑な行政手続きが必要になるはずですが、浪江町の職員の皆さんは私たちと想いを共にし、具体的行動へと結び付けてくれたのです。『通信』が本当に実現できるという確証があったわけがありません。とにかく、お互いに「やってみるしかない」という思いだけだったとふり返ります。『通信』誕生の背景には、こうした職員の皆さんの熱意と復興へのこだわりもまたあったのです。

このようにして『通信』は、私が所有しているノートパソコン1台が取材活動（民間）と役場とをつなぐ実質的な事務局となり、先行き不安な中での出発となりました。私自身の初めての取材活

動は、平成23年6月3日でした。そのほかに福島、山形などでもつながりのあった団体の方々に取材活動への協力をお願いするなどして、同年7月1日創刊にたどり着くことができたのでした。

2. 『浪江のこころ通信』の役割

取材・発行までの手順

『通信』の取材活動は、特に個人情報保護や町民の皆さんの声を大切にするという観点から、慎重な手順を丁寧に重ねてきています。そのため浪江町との間でも協定を締結し、協働事業としての位置づけで実施してきました。また、取材地が全国に広がっているという事情から、取材者の選定ならびに取材者との連絡・調整には民間が持っている情報やノウハウが不可欠であるとして、役場と取材者との中継役としての事務局機能を重視しています。実際には、最初の1年10カ月は、プロジェクトリーダー（櫻井）がこの任にあたっていますが、一見こうした手間のかかる手順を踏んでいることが、トラブルを最小限に抑えながらここまで進んでくることのできた理由かもしれません。これまでの掲載件数は、237件、協力してくれた取材者数は89人（いずれも平成25年12月時点）となっています。『通信』の作業工程は、次の①～⑨の手順で行われています。

【被取材者】 取材を受ける町民の方

【取材者】 取材活動を行う者

【事務局】 役場と取材者をつなぐ中継役

- ①被取材候補者名簿（氏名と住所（市区町村名まで））が、被取材候補者生活圈近郊の取材者に事務局を通して送られる。
- ②取材者は、移動距離などを勘案し、取材可能かどうかを事務局を通して役場に伝える。
- ③役場は、被取材者本人に取材受け入れ可能かどうかの連絡を取る。
- ④被取材者から承諾が取れ次第、役場から事務局を通して、取材者に被取材者の連絡先が知らされる。承諾が取れない場合には、上記①～③がくり返される。
- ⑤取材者から直接、被取材者に連絡して取材日時を調整する。
- ⑥取材者は、取材ならびに原稿作成を行う。
- ⑦取材者は、被取材者に作成した原稿を送付し本人校正をお願いする。
- ⑧取材者は、校正後の原稿を事務局を通して、そのまま役場に提出する。
- ⑨役場は、レイアウトや誤字脱字等の手直しのみを行い掲載する。

『浪江のこころ通信』の役割

『通信』は、単なるお知らせ広報ではありません。『通信』には、浪江町と町民の皆さん一人ひとりの復興を支えるために果たしたいと願ういくつかの役割があります。

【お互いの生活状況や想いの共有】

東日本大震災における被災者の生活の特徴の一つは、分散して避難していることにあります。宮

城、岩手などの津波被災地でも、集団移転・高台移転を待つ被災者の暮らしは、震災前の地域コミュニティ単位にまとまって暮らしているわけではなく、バラバラに分散したまま暮らしているケースが多くあります。したがって、現実の集団移転の現場では、離れて暮らす被災者を「集めては話し合う」作業がくり返し行われています。浪江町をはじめ福島・浜通りの原発事故被災地の場合には、これがより全国規模に広範囲になったこととなります。広範囲であるため、度々集まることは難しく、お互いの事情や想いを話し合えない現実が町民の皆さんの暮らしを取り巻いていることとなります。「自分は浪江町に帰還したいと思っているけれども、友人たちも帰りたいと思っているのだろうか。」「避難先で知り合いもなく、孤独な生活を強いられるけれども、浪江でご近所だったあの方も同じ思いだろうか。」など、現在の暮らしの中にある悲しみや喜び、自分なりに描くこれからの生き方、将来の暮らしの見通しなどをお互いに共有できずにいることとなります。この状況を少しでも改善し、お互いの生活状況や想いの共有を図り、一人ひとりの暮らしを支えていくことが『通信』の役割の一つなのです。ひとは悲しみを共有するだけでも元気になる。想いを共にするだけでも救われるのではないか。その意味で、『通信』は町民の皆さんのありのままの想いを言葉として伝えることを心がけてきているのです。

【町民の皆さんの声を復興に活かす】

実は、スタート時点の『通信』は、「将来の帰町

に向けて…」を目的としていました。しかし、取材活動を重ねるなかで、その目的も少しずつ修正されていきました。町に「帰る」「帰らない」という二者択一ではなく、町民の皆さんの暮らしや生き方は多様であること。そしてその背景には底知れぬ戸惑いや苦しみ、勇気ある決断があることを私たちも取材活動を通して実感することができたからです。『通信』は、あるべき姿を示すのではなく、お互いの考えや生き方の共有を促し、ともに学び合うことを意識しています。その後の浪江町の復興計画の基本方針である「どこに住んでいても浪江町民」を大切にしながら、それぞれの場所でも一人ひとりの生活再建や復興を支えることにあるのです。同時に、『通信』から聞こえる町民の皆さんの声は、町の復興にも活かすことを目指しています。それぞれの生活再建に必要な取り組みは何か。役場に行けることは何か。どのようなふるさと浪江の復興が求められているのかなど、役場が町民の皆さんの声を直接聞くことのできない状況の中で、『通信』が伝える声は復興計画や復興事業を創り上げる一助となってきました。例えば、私自身が町の復興計画策定委員をお引き受けしたのも、この『通信』の取材活動の中で聞くことのできる数々の声を、公式の場で活かすことができると思ったからです。全国46の都道府県に分散避難する現実の中にあつて、町民の皆さんの声を復興へと結びつける役割が『通信』にはあるのです。

【町民の皆さんの声、想いの記録】

『通信』は、平成23年7月の創刊から2年8カ



取材活動の様子。右から2名が取材者。

月ほどが経過しています。時間の経過とともに町民の皆さんの声も少しずつ変化してきています。1年目は肉親を亡くした悲しみや避難の時の苦しみなど、過去をふり返る記事が多くありました。『通信』に掲載されることで、仲間や知り合いに元気でいることを発信できる喜びを感じている姿も見られたりしました。さらに、それらは徐々に先の見えない暮らしへの不安、線量による区域再編（平成25年3月）への戸惑い、そして町民一人ひとりの歩みが見え始めた現在は、取材自体を拒

否されるケースが多くなるなど、町民の皆さんの声そのものや町民一人ひとりと『通信』との関係も姿を変えてきています。しかしその「変化」とは、大震災と原発事故という浪江町が受けた苦しみの「全体像」として、ありのままに受け止めるべきではないでしょうか。むしろこうした変化の経過自体を、町民の皆さんの声や想いの記録として残すことに意味を見出したいのです。最もつらいことは、これから浪江町の皆さんにどのような未来があるうとも、30年後、50年後に子どもや孫の世代がこの大災害をふり返ったとき、「あの時の浪江の人びとは原発事故が怖くて遠くへ逃げてしまった。」などと安易に理解されてしまうことです。そうではなく、その過程には多くの悲しみと苦難、そして人知れぬ心の葛藤があつて今日に至っていることを誰かが語り伝える必要があると思うのです。その役割が『通信』にはあると考えています。大震災や原発事故による被害状況に関する情報や数字の記録は数多く存在しますが、町民の皆さんの想いや心の記録はほとんど存在しない現実があります。『通信』は、震災直後から今日に至る心の記録を後世に伝えようとしているのです。

3. 『浪江のこころ通信』が伝えてきたこと

取材者の皆さんの力

『通信』の取材活動には、町民の皆さんの事情がそれぞれ異なる上、いわば生きていくための課

題に直面しているという意味で、繊細かつ丁寧な対応が求められてきます。町民の皆さんにとつてもそうですが、取材する側も初めての経験となるため、相当な緊張や戸惑いの場面もあつたはずですが、私も『通信』の取材を始めた頃は、町民の皆さんの避難生活の中にどのように入り込めばいいのか。どのように接するべきなのか戸惑いがあつたことを思い出します。それでも、私たちを迎えてくれる町民の皆さんからは、この『通信』の趣旨を理解していただき、たくさんのお話を伺い伝えていただくことができました。ありがたいことだと思つています。取材活動の協力者は、全国で89名になります。この89名の中で、プロジェクトリーダーを担った私自身が以前から面識のあつた方は1割ほどです。ほとんどの方は、私が一度もお会いすることもありません。メールや電話での依頼だけで快く取材活動を引き受けてくださったのです。私と取材者をつないでくださった方々も含めると、『通信』の協力者は全国で相当な数になるわけです。一方で、『通信』の取材は誰にでもできることではありません。取材者をご紹介いただくときにも、取材者としてお願いする場面にも、私自身慎重であつたことは確かです。知名度や組織力などではなく、人びとに寄り添うことができる、被災者の声を熱心に聞いていただける方であるのかどうかだけにこだわってきました。事実、取材にあつたてお願いしてきたことは、『通信』の原稿を作成することを目的とするのではなく、まずは訪問した町民の皆さんの声をじっくり

と聞くということでした。震災後から今日までの経過や想いの丈をしつかりと受け取っていただくことに重点を置いたのです。取材者の中には、取材活動をご縁として、その後も継続的に町民の皆さんとお付き合いられている方もいらっしゃると思います。私からの簡易な説明（依頼）だけで、取材活動をここまで続けていくことができたのは、取材者の皆さんのお力によるものです。改めて感謝を申し上げます。こうした取材者の声については、第3章および第4章をご覧ください。

『浪江のこころ通信』が伝えてきたこと

〔悲しみ・葛藤・希望〕

『通信』は、これまで町民の皆さんのたくさん声を発信してきました。紙面に現れる言葉は限られています。実際の取材活動ではその何倍もの想いも受け取ってきました。語りつくすことのできない苦しみや悲しみ、心の葛藤、そして未来への希望です。ほんの一部ですが紹介します。東京に避難したある男性は、今も福島で復興に取り進む仲間がいるのに自分だけ県外に出てきた想いを「仲間を裏切ったという罪悪感」と表現し、『通信』を通して皆に詫びたいとおっしゃいました。「福島という言葉でしゃべりたい」と、津波で亡くなった夫の遺影を抱えながら都会で孤独に耐える心情を語った方もいました。海のない内陸の土地に避難した上に仕事を得られず、線量の不安のない日本海側に移動して漁師の職を求めようかと悩む想いを「請戸の朝日が見てみたい」と伝えた方

もいました。「子どもが自立したら必ず浪江に帰りたい」と子どもの安全を第一と考えるながらも故郷への想いを涙しながら力強く伝えられた子育て中の若いご夫婦もおられました。こうして発信される町民の想いは、皆さんの共感を得ながら、人びとの絆を育んできたはずですよ。

〔被災者の自立・多様な生き方〕

『通信』は同時に、被災者の自立とは何か、町の復興とは何かを問うてきたと思います。町民の皆さん一人ひとりの自立とはどのようなことを意味するのか。安定した住まいや仕事を得ることのほかにも求めたいこと（求めるべきこと）はないのか。浪江町に帰還することだけが町の復興なのか。それぞれの避難先からもふるさとの復興のためにできることがあるのではないかと。取材活動を通して見えてくる町民の皆さんの生活、あるいは『通信』から伝わってくる言葉は、そうした問いかけやその答えを与えてきてくれました。大震災後の浪江町には、町民の皆さんの多様な生き方があることを伝えてきたと思います。どれが正しいのかではなく、様々な考え方や生き方があつてよいということ。そしてできるならば、『通信』を通して互いを認め合える関係を創り上げていきたいと願ってきました。

〔一人ひとりの変化・成長〕

3年にわたって取り組んできた『通信』は、町民の皆さん一人ひとりの変化や成長を見守ってきたとも言えます。最初の取材の時は、小学6年生だった少年が、中学2年生になった2年後に「再

会浪江のこころ」として、再取材したケースもあります。どこかあどけなかつた少年が、しっかりとした面持ちとなって立派になった姿に取材者側が感激したほどです。『通信』の取材を受けた際には、「浪江にはもう帰れない。」とおっしゃっていた方から、1年後、「今は、浪江町に帰りたいという気持ちが強いです。」と連絡をいただいたこともありました。さらには、取材を受けたことで、震災後、初めてこれから先のことについて家族で議論できたことや、お互いが考えていることをご夫婦の間で理解し合えたというケースもあります。『通信』は、単に町民の皆さんの言葉を文章として掲載するだけではなく、町民一人ひとりに寄り添うことを大切にしながら、生活再建や復興の歩みを見守ってきたことになりました。

『浪江のこころ通信』が始まった経緯やこれまで果たしてきた役割などについてお伝えしました。これからも『通信』が浪江町の復興の一翼を担い、少しでも町民の皆さんの生活が前進することを願ってやみません。いつも『通信』を温かい心でお読みいただきました町民の皆さん、読者の皆さんに感謝申し上げます。そして、これまで『通信』にご協力いただきました町民の皆さん、取材者・協力者の皆さん、さらに馬場有町長はじめ役場職員の皆さんに改めて心から感謝申し上げます。